

てよい。確かに「比較」や、そこで主張される「近似」「類似」については、蓋然性に留まり、その「影響」については論証が難しいことは明らかである。とはいえ、その手法は、我々が既知っているヘレニズム期の混淆性という理解に、従来とは異なるストア主義に特化した解釈による先端的視点や、詳細且つ分析的な文献解読の実証性を与えており、教父哲学前夜の思想状況について多くの意義ある知見をもたらしていることは否めない。評者としては、この点を評価しておきたい。

SZÉCSI József (szerk.)

Keresztény – Zsidó Teológiai Évkönyv 2012

(セーチ・ヨーゼフ 〈編〉『キリスト教—ユダヤ教 神学年報 2012』)

Keresztény – Zsidó Társaság, Budapest, 2013, pp. 446, ISSN 1785-9581, A/5

秋 山 学

本書は、評者が2009年より参加しているハンガリーの「セゲド国際聖書学会」において毎年お目にかかるセーチ・ヨーゼフ氏により、氏が事務局長を務める「(ハンガリー・)キリスト教—ユダヤ教協会」から、2001年以降年報のかたちで発刊されている出版物である。今回取り上げるのは、発行年の関係でこの年報の当巻ということになるが、本評においては、セーチ氏の学術活動および同協会の活動を中心に紹介を行うことにしたい。

セーチ氏は1948年、ハンガリー南部の中心都市セゲドに生まれ、1972年から74年にかけて、ブダペシュトのローマ・カトリック神学アカデミー（社会主義体制下における神学部に対応）において神学学位を取得している（神学教授資格論文は「人間生命の尊厳——戦争と平和の神学」、博士論文は「パラグアイでの布教活動における教会と社会」）。あわせて、エトヴェシュ・ローラント大学で東洋学と古代東方言語を修得、その後国立ラビ養成機関・ユダヤ教大学（以下ユ大と略す；1877年設立）の研究生となり、次いで同機関の主任司書を務める。その間「キリスト教—一致友好協会」の中に「ヘブライ・ユダヤ教部会」を設け、

1991年にはキリスト教・ユダヤ教協会の設立に向けてイニシアティブを執り、同事務局長として現在に至る（HPは<http://www.kzst.hu/>）。2000年には同組織のうちにユダヤ教・キリスト教・イスラム教の宗教学自由大学を発足させ、また以降ハンガリーのキリスト教・ユダヤ教評議会のメンバーをも務める。現在、国立ラビ養成大学、バプティスト神学大学ほかで宗教史宗教哲学関係の科目を担当しておられる。1996年からは、ハンガリーの主要テレビ局ドゥナ TV の番組「聞け！イスラエルよ」の編集を担当、2011年からは同じくユダヤ教・キリスト教・イスラム教の宗教間対話のための番組「アブラハムの後裔」の共同編集者を務める。また1985年から2011年までは、ハンガリー国立合唱団の一員であった。なおセーチ氏は、上述の国立ラビ養成期間が開設する「ユダヤ教自由大学」（HPは<http://www.or-zse.hu/>）にていくつかの講演を公開しており、2014年2月現在、「キリスト教神学における反ユダヤ主義一掃の観点」（2012年3月）、「ヘレニズム期の文献におけるモーセ像」（2012年11月）、「ユダヤ教・キリスト教・イスラム教宗教間対話における可能的な諸観点」（2013年10月）が聴講可能であり、氏の警咳に接することができる。

さて本評が対象とする『キリスト教—ユダヤ教 神学年報』に関して、各巻末には既刊分の全収録論文が掲載されている。それに基づくなら、セーチ氏には2001年の創刊当時から毎年寄稿しておられる。以下にその論題のみ、順に掲げることにして（必要な注記は随時※にて付す）。2001「見ることと行動すること——アンジェロ・ロッタ（1872-1965）のセゲドとの関係、1944年における人命救助：ナジ・ティボル」（※ Angelo Rotta はイタリア人大司教で、1930年から1945年までハンガリーの教皇庁大使を務め、在洪ユダヤ人の救済のために尽力したことで知られる）、2002「古代ユダヤ教文献における胎児致死」（※創世記9:6、出エジプト記20:13、21:22-25などを中心に解釈史を辿る）、2003「アンテイオキアの聖イグナティオス」、2004「ハラハー」（「法規」）、2005「断食を伴う祈り——『トビト書』12:8」、2006「ホロコーストは神学的偶然ではないこと——ニイリ・タマーシュ（1920-1994）追憶」（※ Nyíri Tamás はローマ・カトリックの司祭で神学者・哲学者。第2ヴァティカン公会議神学の展開に努めた）、2007「フィロンの宗教哲学」、2008「ユダヤ思想における預言——注記」（※本号はセーチ氏60歳の記念号でありトキチ・イムレ氏の編になる。後述）、2009「修道、処女性、独身性、単婚、多婚とユダヤ教」、2010「宗教間対話のテ

レベ放送におけるセキュリティ上の政治リスク」、2011「ユダヤ思想における天使論」。これらのうち、2004、2006、2007年のものは、ユダヤ教文化に関する専門誌『希望』*Remény*に掲載されたものである。同誌には、セーチ氏による上掲以外の諸論考も多数収められている（HPは<http://www.remeny.org/remeny/>）。

またキリスト教・ユダヤ教協会からは、『一つの星が昇る！——セーチ・ヨーゼフ講演集』が公刊されており、上掲の講演論文のいくつかを含む次の計22編を収録する。以下に題目を掲げよう。1)「主の祈り」と「カッディシュ」（「頌栄」） 2) 12歳のイエスと「バル・ミツヴォ」（成人式） 3) クムランと新約聖書における救い主待望章句の解釈への注記 4) 七〇人訳聖書に見られる力とカリスマを表す語彙をめぐる注記 5) 古代世界における教会構造概念の諸要因——七〇人訳聖書およびそれに続くユダヤ教文献において 6) 聖書および初期ユダヤ教文献における譬え話 7) 奇跡は常に起こるとは限らないこと——メギラー 7b（※口伝律法ミシュナ・モエードの第10編）；ユダヤ教文献における奇跡 8) 古代ユダヤ教・ローマ・初期キリスト教文献における胎児致死（※上掲講演の敷衍） 9) 「ユダヤ教への改宗者」をめぐる 10) 律法朗読の規則と習慣 11) ハンガリーにおけるユダヤ教事典類、および聖書の補助教材 12) アンティオキアの聖イグナティオス 13) パラグアイでの布教活動 14) チャナード司教ハンバシュ・エンドレ（1890-1970）の在セグド・ユダヤ教徒への配慮について（※Hamvas Endreは1944年からセグド司教、1964年からカロチャ大司教。司教時代、ユダヤ人の強制収容に抗して精神的に活動したことで知られる） 15) 「見ることと行動すること——アンジェロ・ロッタのセグドとの関係」（※上掲参照） 16) 教皇庁文書『われわれは忘れない——ショアーについての反省』をめぐる注記（※1998年3月発布） 17) ヨハネ・パウロ2世によるイスラエルをめぐる声明について（※1998年1月） 18) 「主イエス」 19) アウシュヴィッツ以降の対話——キリスト教・ユダヤ教対話をめぐるラビ・シュヴァイツァー＝ヨーゼフ（1922-）の文書（※Schweitzer Józsefはハンガリーの代表的ラビ） 20) ハンガリーにおけるカトリック神学書にみるユダヤ人像（1969-1996） 21) キリスト教教理教育におけるユダヤ教をめぐる記述の諸観点 22) カトリックとフリー・メーソンの対話と疑問点。これらのうち1) 2) 5) 10) 14) 19) は、上掲した『希望』誌が初出である。

一方、冒頭に紹介した「セグド国際聖書学会」は、セグド司教区のカトリック

司祭ベニツク・ジュルジ (Benyik György 1952-) 師によって 1989 年に創設された中・東欧随一の国際聖書学会であり、セーチ氏は当学会において毎年精力的に口頭発表を行っている。同学会は毎年秋、前年度の発表を基とする論文を収録した Acta を発刊しているが、筆者の手許にある 2009 年度のものから順に、セーチ氏による論題を以下に掲げることしよう。2009 「一人の妻の夫——パウロの勸告」(※大会のテーマは「聖パウロと異教文学」、以下同様) 2010 「ギルグル——ユダヤ思想における霊の輪廻」(「われらは体において生きる」) 2011 「聖書以降の初期ユダヤ文学における〈知恵〉の像」(「神の智慧・人の経験」) 2012 「紀元後の初世紀におけるキリスト教・ユダヤ教の論争でのイエス像」(「イエスからキリストへ」)。なお 2013 年度には「ツェダカー——慈愛のわざ」と題する発表を行っておられる。

次に、本評の標題に掲げる『キリスト教—ユダヤ教 神学年報 2012』の内容に転じよう。本巻には計 27 人、総計 28 本の論文が収録されている(編者のセーチ氏が 2 本執筆)。以下執筆者名と所属、論文名を掲げる。セーチ氏のネット・ワークが明らかとなろう。バビッチ・アントル(ユ大)「最初のユダヤ人哲学史家」(※サァディヤ・ベン・ガオン 882-942 論)、ベニツク・ジュルジ(上掲)「イエスとファリサイ派」、ボルシャニイ・シュミット・フェレンツ(ユ大)「中央アジアのイディッシュ語と中世・現代のユダヤ人ペルシア語、およびイランのユダヤ人小史」、ツイレ・サボルチ(ユニテリアン神学校)「古代奇跡行者の類型との関連における史的イエス」(※ユニテリアンは中欧に多くの信徒を有し、三位一体を否定するキリスト教)、フリードマン・シャンドル(ユ大)「RAMBAN (モーゼス・ナフマニデス 1195-1270) とバルセロナ公開討論 (1263 年)」、ハラステイ・ジュルジ(ユ大)「第一次大戦後の巡礼義務」、ヒドヴェーギ・マーテール(ユ大)「マコヴェッツ・イムレ 1935-2011 (※建築家) の反ユダヤ主義に関する手記断片」、カールパーティ・ユディト(ユ大)「Saved alone——イエメンのユダヤ人とエルサレム・アメリカ人コロニーの発見: 1881-1882」、コルモシュ・エリック(アドヴェンティスト神学校)「旧新約聖書の言語的關係の意味」、クラーニッツ・ミハーイ(パーズマニ=ペーテル・カトリック大学; ※本誌前号拙評を参照)「カルヴィン・ヤーノシュ (1509-1564) のカトリックからの評価」、クシュタール・ゾルターン(デブレツェン・改革派神学大学)「神の祝福のレベルに照らした家族——『詩篇』第 128 篇の使信」、マルトン・ジョルト(バプティス

ト派牧師)「ラビ・リヒテンシュタイン=イジャーク (1825-1909) の生涯と事績」, マルトシュ・レヴェンテ・バラージュ (ジュール神学校・カトリック司祭)「オリーブの樹と接ぎ木された枝——半ば忘れられたヴァティカン文書の意義づけ」(※2001年発布の「キリスト教徒の聖書におけるユダヤ民族と聖典」をめぐる論), ネーメト・パール (貿易大学)「紀元後8世紀のイスラム・キリスト教対話」(※ティモテオス1世ネストリウス派総主教〔在位780-823〕とアッバス朝第3代カリフ・アル=マフディとの781年の対話について), オラー・ヤーノシュ (ユダ大学長)「ユダヤ学の移入者バッハー・ヴィルモシュ (1850-1913)」, S. サボー・ペーテル (ジグモント・キラライ大学)「宗教間対話のトピックをめぐる哲学・人間学に基づく考察」, シェーナー・アルフレッド (ユ大)「ミシユコルトのユダヤ人は当地の牙城であった」, サントーネー・バラージュ・ユディト (ユ大)「ブダのプリム祭」(※エステル記に由来する初春の祭), セーチ氏の2本の論文「キリスト教会の7つの声明」(※2009年・2012年に発表された宗教間対話に関わる7文書の紹介) および「海に面した家」(※使徒行録10:6, ヤッファをめぐる論考), セーケイ・ヤーノシュ (カトリック=エステルゴム・ブダペシュト大司教区補佐司教)「祭司文書の神学をめぐって」, スイゲティ・イエヌー (アドヴェンティスト神学校)「イエスの終末論的説教の構造」(※マタイ23-25章), トキチ・イムレ&トキチ・ペーテル (アドヴェンティスト神学校)「金銭と貨幣の聖書における連関」, トュルク・チャバ (エステルゴム神学校;カトリック司祭)「新たな福音宣教の聖書的基礎」, テュシュケ・ラースロー (パーズマニ・ペーテル大学人文学部アラブ講座助手)「人間の〈本源的秩序〉とジハード(聖戦)」, ウールマン・イヴァーン (ユ大)「聖イシュトヴァーン(※ハンガリーの初代キリスト教国王, 在位1000-1038)の子供たち」, ヴィーズ・ペーテル(「キリスト者の連帯」CSIハンガリー代表)「世界におけるキリスト教迫害による人権侵害」。なお巻末には、収録論文の総目次(2001-2012)が掲載されている。

以上のようにセーチ氏は、諸機関での講演、『希望』への論文執筆、セゲド国際聖書学会での口頭発表等の学術活動を欠かさずこなす一方、本『年報』の編集を通じて、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教の対話という、欧米が直面する課題に積極的に取り組んでおられる。『年報』に寄稿する顔ぶれからも、氏の深い人徳が知られる。氏は著述に際して「カトリック神学者」という肩書きを用いる場合が多く、シヨアーの問題を論ずる場合にも、強制収容に抗する活動に携わつ

たハンガリー人の事績を中心に光を当てるといった姿勢が特に顕著である。

さて、氏の「ユダヤ思想における預言」(上掲『年報』2008 年号)は、聖書学とユダヤ思想をめぐる深い省察を基に展開された論考であり、預言者が民族主義に囚われた存在ではないこと(列王記上 19:15)を明らかにするものである。以下章題を通じて内容を紹介する。1) 民族主義・普遍主義・選民思想: 1) 民族主義と普遍主義 2) 普遍主義と選民思想 2) 社会的役割: 1) 社会における預言者の役割 2) 政治 3) 歴史的枠組み 4) イスラエルの将来 3) 偽預言者 4) 聖書外の預言——マリ 5) タルムード 6) ユダヤ哲学: 1) アレクサンドリアのフィロン 2) 中世ユダヤ哲学: ①サァディヤ・ベン・ガオン (882-942) ②ユダ・ハレヴィ (1075-1141) ③マイモニデス (1138-1204) ④ヨゼフ・アルボ (15 世紀: ※スペインのラビ、『諸根の書』の著者) 3) 現代ユダヤ哲学者 (※モーゼス・メンデルスゾーン 1729-1786, ヘルマン・コーヘン 1842-1918, カウフマン・コーラー 1843-1926, シャロモン・ルドヴィヒ・シュタインハイム 1789-1866, サムソン・ラファエル・ヒルシュ 1808-1888, アシェル・ヒルシュ・ギンスベルク 1856-1927, メハネム・ムルデカイ・カプラン 1881-1963, マルティン・ブーバー 1878-1965, フランツ・ローゼンツヴァイク 1886-1929, アブラハム・ヨシュア・ヘシエル 1907-1972, ヨゼフ・ドフ・ソロヴェイチク 1903-1993, アブラハム・イサアク・クック 1865-1935 を扱う)。

日本におけるユダヤ思想研究は、なお視座の確立を必要としている。また旧約聖書学研究に際してユダヤ教の知見を活用するという方法論は、まったく未開拓だと言えるだろう。内在的でありながらも過去の批判に終始することなく、未来に向けて希望の光を灯すセーチ氏の活動は、われわれにも確かな導きの星となることであろう。